

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 松 尾 朗 子

論 文 題 目 The dynamics of culture and moral judgments

(文化と道徳判断の力動的関係)

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院情報学研究科 教 授 唐 沢 穰

副 査 名古屋大学大学院情報学研究科 教 授 大 平 英 樹

副 査 名古屋大学大学院情報学研究科 准教授 北 神 慎 司

副 査 名古屋大学大学院情報学研究科 准教授 石 井 敬 子

論文審査の結果の要旨

人間の道徳的判断の基礎にある心理過程の詳細が、近年の社会心理学的研究によって明らかにされるのに伴い、道徳判断の文化的基盤についても多くの知見が得られている。本研究は、道徳判断の根拠とその理解が、同一文化内および異文化間でどのように共有されているかを7件の実証研究をもとに分析することにより、道徳判断の通文化性と文化的差異を解明することを目的とした。

第1章で著者は、当該分野における理論を概観した後、「自律」「共同体」「神聖」の各倫理が、道徳判断の文化的特質を分析する際の手がかりとして有用であると主張する。また、心理学研究における「文化」の意味と、心と文化の相互構成的関係について議論した後、これらを援用した著者の理論的枠組みを提示している。第2章では、道徳判断の根拠に関する人々の素朴理解の内容が検討された。上述した3種の倫理に関する違反状況の具体的記述を、日・米で多数収集し、各事例が違反の定義に適合する程度を判定したところ、両国の大学生が各倫理を概ね正しく理解していることを示した(研究1)。また日本では共同体倫理の違反事例が特に想起されやすいことも示唆された(研究2)。第3章では、「状況サンプリング法」を用いて、文化内および文化間での理解の一致を調べた。違反状況の産出者自身が用いる根拠を基準とした分析では、特に共同体倫理の違反について、他国産よりも自国産事例の根拠が正確に理解され、より非道徳的であると判断されることが示された(研究3)。理論的定義を基準とした分析では、日本産の共同体倫理違反および米国産の自律倫理違反の根拠が、ともに日米の両国で理解されやすく、また米国人参加者は全般に、他国産事例よりも自国産事例を強く非難することが明らかになった(研究4)。第4章では、ソーシャル・ネットワーク上における道徳関連の言説を、計算社会科学的なアプローチにより分析している。まず、従来の英語版「道徳基盤辞書」をもとに、その日本語版をコーパス分析などにより開発し(研究5)、さらにこれをTwitterでの道徳遵守・違反行為の記述に適用して、この辞書の妥当性を検証している(研究6・7)。

本研究は以下の点で高く評価できる。すなわち、道徳判断の内容に関する通文化性と文化固有性を日米間で同定するのに成功したこと、道徳判断の文化的共有性を手がかりに心と文化の相互構成的関係を明らかにしようとした着想の独創性と、その理論的意義、そして多様なアプローチ法を採用した学際的意義である。一方、得られた知見の間の相互一貫性や、理論的統一性について、より精緻な議論と実証的検証の必要性が示され、今後の課題も明らかになった。

以上の理由から、本研究には十分な学術的貢献が認められる。よって、本論文の提出者である松尾朗子氏は博士(心理学)の学位を授与される資格があるものと判定した。